

与謝野晶子と堺

近代女性思想史研究者

山本 千恵



●堺市宿院の晶子生家あとの碑

湯気にほふ昼と火桶のかず赤き夜のこひ
しき父母の家

明治四〇・六『常夏』

晶子がこの時代の多くの秀れた女性の例と同じく故郷を捨てる事にしか活路を見出せず、まさに一九〇一（明治三四）年、二〇世紀の最初の扉をあけて陽光にむかい、「百三十里あわただしの旅」を翔んだ経緯はよく知られている事である。

晶子は自分の捨てた故郷を決して懐かしむことはない。「甕の水の腐った時、泡立って中から口を上げて嘔ぐ金魚のように、自分も妹も小さい時からあの小都会の陰鬱な、不秩序な家庭を咀嚼していた。」（大正二年『明るみへ』）

とはいえ、『みだれ髪』を嚆矢とし、明星派浪漫主義の女王と謳われ、生涯五万首といわれる作歌、二〇冊の歌集、女性の自律的な生き方を語り続ける十五冊余の女性論評、源氏をはじめ古典の評釈、童話、詩等、現実の生活苦と十一人の子育てのまなかに端座しつつ豊穡な実りを生み出し、その根底の精神に愛と自

由、相互尊重を置いてやまなかったこの女詩人の生まれる必然は案外、堺という土壌に色濃くあつたのかもしれない。

鳳志よう（晶子）が堺の菓子老舗駿河屋の二代目宗七、妻津祢の三女として生まれたのは明治十一年十二月七日のこと、西南戦争が終わりようやく維新の動乱の落ち着き、東京府会の開かれた頃、そして自由民権運動が大阪から強まろうとしている混沌とした朝でもあつた。

父宗七は商売は妻にまかせ、読書・俳句にあけくれる堺の「旦那中の旦那」とたたえられた人で、明治九年には市会議員として恐らく日清戦争後の増税の中で営業税等に取り組んでもいた。晶子の甥、鳳翔孝氏の話（一九八二・九）によれば「派手好きであつたらしく、明治はじめ、ええじゃないか」の踊りの中に入つて町内を廻つた。」と聞いているという。また、「今、西洋では」が口ぐせの人であつたとも伝えられている。実際、明治十六年刻成の駿河屋の絵図（堺市図書館蔵）には珍しい洋風の窓、屋上の時

計の風体などそのハイカラさがうかがわれる。^{（注）}

晶子は上の兄の不慮の死のあと、身代わりの男児を望んでいた父に「おぼえ睦じからぬ子」として三歳までを叔母の家に里子に出されたが、それでも「父とは店の話や俳句や唐詩選の話でもわたしと意志の通じる所があつた。」（『ある朝』明治四四・七「早稲田文学」と記すとおり、ご一新期の青年であつた父親から無形に受け継いだものは多かつたと思う）。

明治二年、堺区立女学校（現、泉陽高校）設立の年、晶子は入学する。民権運動に敗れた川上音次郎が「心に自由の種をまけ」というオッペケペー節で旗上げたのは明治二四年の堺である。晶子はそのとき十三歳、姉に代わつて店の帳面役をつとめ、遊芸のかたわら父の蔵書、源氏をも読み始めていた。果て知らぬ大きな憧れが晶子の心を浸し始めていた。堺の海の高鳴りは世界の響きを伝えていた。現実と想念との分裂が晶子の中に定着した。

堺にある旧派の歌会に属した晶子は一年足らずで退会する。「堂上歌風の窮屈な修辭上の制約、独創性のない平凡陳腐さ」「非情熱的な題材の範圍への停滞」（『晶子歌話』大正八）に納まりきれない晶子の批判精神がすでに波うち始めていた。明治三年、与謝野鉄幹の読売紙上

●ラッセルと晶子の会見

(婦人画報 大正十年)



の歌に一つの啓示を得て、後の表現でいう所の「因習思想の破壊者、民衆のために歌を解放するもの、個性の発揚」(同)とめざめたのは二〇歳の時である。

折しもこの明治三十九年から三〇年にかけて晶子と共に旧派に属していた河野鉄南、宅雁月ら堺の青年歌人達は同じく新派への移行を示す。日清戦争後の産業の上昇期にあつて新文学への胎動があつたのだ。晶子が彼らの結成した関西青年文学会に入会したのは明治三二年。新体詩「春月」をもつてである。歌ではなく、短詩としての理解は、鉄幹の新詩社へ疑わず参画する土台でもあつた。

明治四三『春泥集』

明治三年の晶子の激変を示す歌である。よく知られている覚応寺住職、河野鉄南への二九通の書簡が始まるのは、この年一月六日、新年会のあつた三日あとである。

それは、一つに詩文ではやさしいことを言う男たちが「さて相見参らすれば生意気な小癪などはかりの態度」を晶子に示したなかで、鉄南のみが「女とへだてさせ給はでやさしくいたはり給へる」ことに感激してのものであり、また男たちのうち続く上京にひきかえ、志のとげよりのない女の身のはかなさを「つらつら

はかなく候」と訴える文面である。

その「恋情」が対象を転じたのがいうまでもなく、八月四日の初会を始めとする鉄幹(寛)との出会いである。それははじめての現実的な恋の訪れとして、今ここにかへりみすれば我なさけ闇を怖れぬめしひと云はむ

一〇月『明星』

と歌わせるほどの激しさを伴った。

九月三〇日、晶子は鉄南に別れを告げる。「わが名を手謝野様にかいし給ひしはあなた様に候。何も申すまじ。高師の松かげにひとのささやきうけしよりのわれはただ夢のごつみの子になり申候。」そうして幾つかの変遷を経て、晶子は薄幸の姉は奈をはじめとする、周りの私たちの屈辱、「この国のホームに泣くもの」への訣別と共に、詩にうみぬ恋にうみぬと云ひし君われにあらざるやあたらしき歌

明治三四『明星』

という矜持とを持ち、「芸術の黒き幕かいたる」一人の創造者として寛との協働を選びとり故郷を後にしたのであつた。わが心いやしからぬを唯一つたからのごとく思へり恋に

明治四四二『東海』

晶子のこうした出発をみると、ずっとぐれた個性はその時代と風土の香気をもつとも輝かしく表現する、ということが

思われてならない。晶子の心情と理性の奥底に燃えさかる火種が、堺市民の血脈を受けついでいないとはいえないだろう。もともと堺という町は古代から特異な固有のうちに生きのびてきた。大和朝廷の朝鮮との往来、帰化人の移住を通じ最先端の大陸文化への憧れはいつでも堺の町にあつた。熊野信仰の通路は堺の大道筋を貫き、晶子の生家はその途上、甲斐町にある。いつも人びとの願いの吹きすぎる町であつた。

鎌倉幕府への大鳥荘の争いは自らの、農業生産力、商業への確信の上に立ち、新しい体制をもとめる反抗でもあつた。南北朝時代、争奪の渦にまきこまれはしたが、五十数年の対立の間、町は主戦場にはならず、逆に港としての発展をきわめた。室町に入り対明貿易での巨大な富を背景に自治都市堺を形成してしまふ。ことにより自治都市堺を形成してしまふ。

町のまわりに濠をめぐらし、周辺の大名家たちに軍資金を提供しつつ平和を維持する。実業を土台とする自由と平和の獲得、その現実的な精神は晶子の思想の骨格に重なる。くずおれるほど柔和な晶子の内面にしたたかに覗く民衆精神、大正デモクラットとして花ひらくそれは堺という原郷に深くつながる。

晶子は「世界民・国民・個人」の三面一体をもとめて堺を奔り出たのだ。

●注1

『駿河屋考』新聞進一「短歌研究」

一九五一年三月

●参考文献

『評傳与謝野鉄幹晶子』逸見久美

一九七五年 八木書店

『女たちの近代』拙稿所収一九七六年 柏書房

『与謝野晶子に世界・堺時代』拙稿

『学院大学』一九七九年九月

『大阪府の歴史』山川出版社

一九六九年